

## 脊髄終糸嚢胞の臨床像—学位取得に至るまで—

### ☆推薦文☆

瀬尾恭一先生は山形県で初めて自治医大での後期研修を取得し、小児脳神経外科で1年間研修されました。当科で外来紹介受診する最も多い病態に仙尾部の皮膚陥凹があります。その検査で時々発見されるのが「終糸嚢胞」ですが、これまでは「正常亜型」と信じられ臨床的意義が重要視されず正確なデータがありませんでした。そこに注目し臨床データをまとめ発表したのが今回の論文です。研修終了後、山形で内科医として地域で勤務しながらデータと向き合って論文化し、今回学位取得まで成し遂げました。ちなみに後期研修の翌年には脳神経外科専門医も取得しています。瀬尾先生の強い信念と、綿密な計画と、周囲の卒業生への配慮と、彼らからの厚いサポートのおかげだと思います。素晴らしいロールモデルとして多くの卒業生の参考になると思います。

自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児脳神経外科 五味 玲

### 山形県立中央病院 脳神経外科 瀬尾 恭一（山形32期）

山形県32期卒の瀬尾恭一と申します。この度、母校自治医科大学で脳神経外科学講座の五味玲教授のもと作成した論文<sup>1)</sup>がAcceptされ、「博士(医学)」の学位をいただきました。本誌投稿の機会をいただきまして感謝申し上げます。学位取得に至るまでを振り返って寄稿させていただきたいと思っております。



私は、2009年に自治医科大学を卒業し、地元の山形県に戻り初期研修、へき地医療勤務に従事しましたが、義務年限途中卒業後6年目に1年間自治医大脳神経外科で研修をさせていただく機会をいただきました。大学病院での研修・勤務は初めてで、臨床はもちろんのこと学術的なことも様々な教えていただき、また国際学会での発表も経験させていただきました。

その後、地元のへき地勤務に戻った際、せっかく大学で学ばせていただいた経験を生かして学位が取れないかと考え始めました。あるいはその動機は、このNews Letterで同級生や先輩後輩が学位を取得している事を知り、あこがれの様なものがあつたかもしれません。

地元に戻った年の夏に開催された県人会総会に亀崎教授が来県され、学位取得について相談させていただきました。学位取得には5年間の研究歴が必要である事、主要論文(IF $\geq$ 1.0)と参考論文(主要論文と関連がなくても可、Case report可)が1編ずつ筆頭著者としてacceptされている事、TOEIC:600点以上のスコア獲得していることが条件であるご教示いただきました。この時点で既に研究歴は3年あり、参考論文としてのCase Reportはあったので、自治医科大学の研究生の登録をして主要論文を作成することを目標としました。そして、自治医大でのオープンであり、CRST\*メンバーでもある五味先生に引き続きご指導いただき、論文を完成させて学位を取ることにしました。学位取得まで、五味先生とはメールで何度も何度もやりとりを重ね、また学会で会う度にも相談させていただきました。たまたま五味先生がプライベートで山形に来られた際も、一緒に観光しながら論文の手直しをしていただいたりしました。(編集部注 \*CRST: Clinical Research Support Team in JMU <https://www.jichi.ac.jp/dscm/CRST.html>)

自治医大では、主にとちぎ子ども医療センターでの小児脳神経外科領域を中心に研修させていただきました。この時の研究テーマのひとつが脊髄終糸嚢胞です。

神経管形成の異常に伴い発生するとされている脊髄終糸嚢胞は、潜在性二分脊椎が疑われる新生児に対する腰部脊髄のスクリーニング超音波検査で指摘されることが多いですが、その多くは通常無症候かつ自然消失することが多いため正常亜型とされ、これまで詳細な研究が行われておらず、臨床的意義は明らかではありませんでした。また先行研究がほとんどないためフォローの方法についても一定の見解がありませんでした。医療機器・技術の進歩により検出される頻度が多くなってきており、臨床上一定の指標が必要であろうと考え、今回の研究に至りました。

とちぎ子ども医療センターでは、終糸嚢胞の多くの症例でMRIフォローがなされており、これらのフォローデータをもとに、本当に正常亜型であるのか、特に注意してフォローすべきものはどのようなものかなどを調べてみることにしました。特筆すべきは、今回の研究が終糸嚢胞を有する乳児に対して現存する報告の中で最も多くMRI検査を行ったシリーズであるということです。これは日本の保険診療制度やMRIの普及率といった我が国の独自の環

境がなせるものです。

結果、今まで多くは自然消失するとされていましたが、MRI の heavily T2 強調像 (CISS 画像) でフォローするとある一定の割合で終糸嚢胞が残存することがわかり、更には増大傾向を示す症例もあることが分かりました。増大例は全て終糸脂肪腫を合併しており、その関連性が疑われました<sup>1)</sup>。また、論文作成後にも検討を重ねていくうちに、画像的に脊髄中心管との連続性と増大例の関連も疑われました。増大例については、外科的切除をおこなっていますが、病理学的に検討を行い、引き続き画像所見を含め検討し論文化する予定です。

1つのテーマについて論文化する過程で色々調べてまとめると、別の疑問点や問題点が浮き彫りになり、それをまた調べる必要が出てきます。この繰り返しが発展につながります。学位授与式の際に永井学長が、山極勝三郎の「行きつけば また新しき 里の見え」という句を紹介して下さいましたが、まさにそのような境地です。今回は、今まであまり注目されてこなかったテーマが研究の対象となり、最初はその意義を見失いかけていましたが、何が分かっているかが分かっていないのか少しずつクリアになっていき、そこから発展していく過程を体感し、非常に面白さを感じました。そして、多くの医師が言うように、こういった過程が臨床医としての視野を広げるのだということを実感しました

自治医大は、無償の愛で様々な支援をしてくれます。日々の臨床に関すること、地域における研究課題や専門医・学位取得に関連したキャリアパスのことなど、卒業生のあらゆる悩みを受け止めてくれます。

論文作成し投稿して Accept までこぎつけるという一連の仕事は、特に最初は決してハードルは低くないと思います。そんな時に相談できる場所、指導して下さる教員が非常に心強く存在するのが自治医大です。臨床上何か困った時には、是非地域医療オープンラボ・CRST の門をたたいてみてください。

私の様に、キャリアの多くを大学病院ではなく市中病院で過ごし、学位を取得したいがどうすればよいか分からないといった卒業生の参考に、こんな選択肢もあるのだということで、本稿が一助になれば幸いです。

最後に、五味先生には、学会発表をはじめ、主要論文・学位論文作成、学位審査のプレゼンテーションなど 0 から 10 まで丁寧に指導いただき本当にありがとうございました。また学位取得にあたっては学事課をはじめ、様々な部署からご支援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

1. Kyoichi Seo, Hirofumi Oguma, Reiko Furukawa, Akira Gomi. Filar cysts in rare cases may progress in size, particularly when associated with filar lipoma. *Clids Nerv Syst.* 2019; 35(7), 1207-1211



左：山寺観光にて。1000 段を超える石段を一步ずつ登り煩惱を払いつつ論文の構成について議論しました。

右：1<sup>st</sup> congress of AASPN@Taipei 会場前にて

**地域医療オープン・ラボ News Letter 原稿募集**

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボ News Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介します

☆ 自薦・他薦を問いません

☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ [openlabo@jichi.ac.jp](mailto:openlabo@jichi.ac.jp)

[発行] 自治医科大学大学院医学研究科  
地域医療オープンラボ運営委員会  
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1  
TEL 0285-58-7477 / FAX 0285-44-3625 / e-mail [openlabo@jichi.ac.jp](mailto:openlabo@jichi.ac.jp)  
<https://grad.jichi.ac.jp/>